

FD がさらに広がりを見せるように FD ニュース第2号発刊に寄せて

中京大学 FD 委員会委員長 安村 仁志

明治から昭和にかけて国内外で活躍した新渡戸稲造は、あのクラーク博士で有名な札幌農学校で学び、その後アメリカ・ドイツに留学しました。帰国後母校の教授に就き、高度な専門教育にあたるかわら、北鳴中学校の教頭として中等教育にも携わったうえ、勤労青少年のために遠友夜学校を設立しました。さらに、女子教育の普及にも力を注ぎました。国際的には設立直後の国際連盟で事務次長として働いたほか、名著“BUSHIDO”によって日本文化の精神を欧米に伝えました。このように、新渡戸は学力・身分・性別・国といった「隔ての壁」を取り除こうと努めるとともに、教育においては、“教える者と学ぶ者の人格的交わり”を重んじ、「学問と実行」を掲げて全人的成長を促しました。

今回 FD ニュース 2 号発行にあたって、FD 活動として行っている「授業アンケート」とは別に、より“生の”声を直接聞いてみたいと思い座談会を開きました。参加した学生の皆さんからは率直な意見を聞くことができ、大いに今後の参考になりました。教員と学生が普段の立場を超え、より良い授業を目指して対等に語り合うことにおいて、新渡戸が大切にしたもの的一端を味わうことができたような気がして、貴重な時間でした。

今後も引き続き、教員・学生・職員のそれぞれがベストを尽くし、一歩ずつ前へ進むことで、本学の学びがさらに実り多きものとなることを願います。

より良いFD活動のための 学生のホンネ



座談会

中京大学では、FD 活動を「大学を構成する学生・教員・職員の三者が、より良い授業を目指して意見交換するなど、協力・工夫して進めていく営み」と考えています。大学をより良いものにするため7人の学生に集まってもらい、前向きで建設的な問題提起をしてもらいました。(7人には事前に普段受けている授業やシラバスについてのアンケートを書いています)

良くない授業

大学生にもなって何故授業で騒ぐ？

酒井教授●今日は授業アンケートだけでは聞けない学生の皆さんの本音を聞かせてもらうために集まってもらいました。まず、これまでで良くなかったという授業を教えてください。

渡邊さん●学生がうるさく騒ぐ授業は嫌ですね。

柳瀬さん●実技では真面目にやらない学生が多くて、それ

をコントロールできない先生もいらっしゃるの、真剣にやろうとしている学生たちが迷惑することもあります。

石黒さん●僕も学生間のやる気の差を感じる。最近は慣れてきたけど、ちょっとムカムカすることもあります。

柳瀬さん●ムカムカはすごくある。1、2年生の必修科目はものすごくやりづらかった。仲の良い学生たちの横のつながりが、逆にマイナスに働いているのかも。

酒井教授●人間関係が作れる場でもあるが、それがうっとろしかったり、勘弁してくれという場合もあると。

中京大学の FDとは

FDとは、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みのことを意味します。中京大学では組織的な取り組みを推進するため、学部・研究科を横断して「FD委員会」を設置しています。授業に学生が満足し、力をつけられれば、当の学生はもとより、授業をする教員も勉学をサポートする職員も充実感を得られるでしょう。その意味でFDを“大学のすべての者の幸せのため”と位置づけ、それを目指してベストを尽くすもの(For Doing our best!)ととらえています。

より良いFD活動のための **学生のホンネ** 座談会



柳瀬さん●勘弁してくれが多かった。先生も、お前ら勝手にしろという感じでしたね。

酒井教授●先生方も分かってはいらしても、有効なコントロールができない？

上條さん●大教室で大人数で受ける授業では、前の方は静かだけど後ろの方はガヤガヤしっぱなし。結構ストレスがたまります。

渡邊さん●経済学部では300人を超える授業がいくつかあって、ほとんどがうるさい。一つだけ静かな授業があって、それは先生が威圧的で怖いというのと、授業の最後に紙を渡されて感想を書くんですが、授業を聞いていないと感想が書けない。

酒井教授●静かにさせるには、先生がかなり高圧的にやらないといけないと。

上條さん●それ、どうなの？よく分からんけど、あんまり好きじゃない。

酒井教授●他大学の例だけど、先生が何度も注意したら後ろの方の子が黙って良かった、とアンケートに書いてきました。

西尾さん●高校みたい。大学に来てまでそれをやるかっていう感じはします。勉強したくない子は放っておけばいいんじゃないかと思う。

蒲さん●静かなのは嬉しいけど、授業が途切れるのは嫌です。

酒井教授●教員としても、授業の流れを止めて注意すると進めにくいしね。



司会

FD 委員
シラバス・公開授業検討委員会委員長
酒井 敏教授
(文学部)



中京大学副学長・
中京大学 FD 委員会委員長
安村仁志教授
(国際教養学部)

良い授業、理想の授業とは



対話型、課題解決型、能力別クラス分け

酒井教授●次に、これまでで良かったという授業は？

石黒さん●国際英語学部の語学の授業はペアないし3、4人でグループワークをしたりディスカッションをすることが多いんですが、友達と間違っているところを指摘しあったりして、訓練になっていると思う。

柳瀬さん●実績を残していらっしゃる先生方がどういうことを考えているのに関心があるので、少人数でディスカッションタイプの授業が理想です。知識と実践を組み合わせ、机上で勉強したことが実践につながるような授業も好きです。

蒲さん●パソコンを活用した授業です。ネットで課題が出されて、自分でやったものを次々にネットの掲示板に貼っていき、成果が一目で分かるという授業が好きでした。

上條さん●僕のゼミではパソコンはあまり使わず、先生との対話型ですね。自分たちの意見をグループで発表し、それに意見を言い合う形の授業です。その授業にはOBの方が付いていて、分からない時とかエラーが出た時などにすぐ聞けたのが良かった。

酒井教授●大学はフェイス・トゥ・フェイスで授業をするのが基本だと思うので、教室の雰囲気や友達との関係も含めて、対話型の授業がいい、という意見は貴重です。君たちのアンケートをまとめると、先生が目が届くような4、50人ぐらいで、対話型、問題解決型の授業を増やしてほしいという感じですね。

石黒さん●国際英語学部は英語のレベルによってクラス分けされてるので、快適に授業を受けられています。

渡邊さん●経済学部の中には数学を軽く見ている人がたくさんいて、数学的な知識を問われるミクロ経済やマクロ経済で単位を落としてしまう人が結構います。経済学部で数学ができないというのは致命傷だと思う。数学が嫌いなのに卒業後は銀行に行きたいという学生もいて、数学



FD 委員
教育活動サポート検討委員会委員長
白井正敏教授
(経済学部)



FD 委員
大友昌子教授
(現代社会学部)



FD 委員
檀上弘文教授
(法務研究科)

が嫌いなのに大丈夫なのかと思いました。

酒井教授●石黒君が言ったみたいに、能力別クラス編成があったら状況は改善すると思う？

渡邊さん●そうですね。能力別にして、あと今、経済学部で選択必修になってる経済数学を必修にすればいいと思います。

積み重ねの授業で成長を実感

カリキュラム構成

酒井教授●今日来てもらったのが3、4年生の人ばかりになったので、4年間を通した授業の流れみたいなことで何か意見を聞きたいのですが。

渡邊さん●他の学部の授業が取りやすい環境が整っているのは満足しています。

柳瀬さん●僕は体育の教員志望で入学しましたが、実際に教員になれるのはごくわずかです。でも、たとえば卒業後にビジネスを興したいと思っても、経済や法律の知識がないのでビジョンが描けない。入学した時から、卒業後はいろいろな道があるんだよということを提示して、それに沿ったカリキュラムが用意されているといい。

酒井教授●全学開放科目があるけど、豊田から八事まで聞きに来るのは大変？

柳瀬さん●往復するだけで時間もお金もかかります。

蒲さん●八事と豊田のキャンパス間にバスを運行させてほしい。

石黒さん●国際英語学部でも英語ばかりやっていましたが、昨年から国際ビジネス研修という授業が始まり、経済について勉強できるようになりました。僕はもともと航空ビジネスに興味があったので、将来のビジョンが描きやすくなったのは良いですね。

酒井教授●自分の可能性を広げられるような4年間のカリキュラムを自分で描けるように、というのが理想かな。

蒲さん●授業のステップアップについてですが、1年生の最初の頃に基本的なプログラムを覚えますが、これは標準語みたいなもので、他の言語は言い方が違うだけで、どんどん積み重ねてステップアップしていける。ソフトウェアでも1年生の時のベースがしっかりしていれば、その後で難しいことが出てきても頑張れる。こういう積み重ねで成果が分かりやすい授業がたくさんあると、やる気にもつながると思います。一方、実際には最初で失敗してしまう学生が結構います。

辻井さん●ただ、同じ科目でも1と2で違う先生ということがあって、使う題材や授業のテンポが変わって、ステップアップになっているのかが分かりにくい授業もある。

酒井教授●なるほど、理系ならではの難しさかもしれないね。

西尾さん●文学部は3年からゼミが始まりますが、演習で

いざ発表となった時、レジュメの作り方とか調べ方とかで困っている子がいました。もっと前から演習の授業があったらいい。

酒井教授●そういう意見が多くあったので、今年から2年生に演習形式の授業を作りました。

石黒さん●国際英語学部でも3年からゼミが始まりますが、英語で書く力はあるのに、日本語でレジュメや論文を書く訓練をしていないので、1、2年でそういう訓練ができればいい。

上條さん●僕の取っている授業では、1、2年は配られたプリントの内容をしっかりと読み込み、学生で討論するというのが主な内容だったので、学年が上がるにつれて蓄えた知識が出てくるように訓練されていたのかなと思う。



大学に望むこと

学食から授業まで

酒井教授●何か大学へ希望することは？

柳瀬さん●八事キャンパスの情報がなかなか入って来ないので、ネットなどの連絡ツールがあるといい。また人の移動だけでなく、情報の交流ができる場があればいいと思います。

酒井教授●豊田の学生は八事についてあまり知らないし、逆もそうだよね。

石黒さん●生協の学生委員だと八事と豊田のつながりがあるので、それを活用できるのでは。

蒲さん●友人が豊田キャンパスで部活の部長をしていますが、部長連を通じて八事も交流があるようです。そういうのが他の場所でもあるといい。

辻井さん●自宅にパソコンがない人のために、携帯電話でアルポが見られるようにしてほしい。

上條さん●学食のメニューをもっと充実させてほしい。



文学部日本文学科4年
西尾侑記さん
岐阜県岐阜女子高等学校出身

国際英語学部国際英語学科3年
石黒洋二郎さん
愛知県春日丘高等学校出身





柳瀬さん●体育学部に関して言うと、視野を広げられるような授業は2年以降が多かったので、1年生の時にスポーツ学入門みたいな授業があると良かった。

蒲さん●2年の必修を落とした友人がいて、今年また受けていますが、分からないところを少し教えてあげるだけで、すぐ理解できます。そういう学生間で教え合うような場を系統的に作ってもらえれば、単位を落とす学生もいなくなって理想的だと思う。

酒井教授●特に実習系の授業では有効だね。学生同士ではなく、TA（ティーチング・アシスタント）ではどうだろう。

蒲さん●実際にTAが付いている授業がありますが、学生の数が多いため全員がみてもらえるわけではないし、手を挙げにくい子もいるようです。

辻井さん●周りにいる友達ならすぐに聞けるし、聞きやすい。

渡邊さん●経済学部にごそ、そのTAがほしいですね。数学を取らずに経済学部に入った学生は、学年が上がると授業が理解できなくなることがあるので、分からないことをすぐに聞ける環境があるといい。

西尾さん●文学部の授業ではTAは特に何もされなくて、必要なのかなと思ったことがあります。

酒井教授●TAは大学院生に大学教育を体験してもらう教育実習的な意味合いもあるが、文学部の授業で活躍してもらうのは難しいかも。渡邊君が言ったみたいに、積み上げ式の学習で学生の理解度が違う場合、TAがこれほどだと教えてあげるのは効果的だろうね。

石黒さん●大学院生からのアドバイスは役に立っていますね。やはり学部で4年間経験しているので。

安村教授●今後もTAは充実させていきたいですね。TAまでいなくても、たとえば就職が決まって比較的時間のある4年生が下級生のクラスでアドバイスをするSA（チューデント・アシスタント）という制度も考えています。皆さんも是非、協力してください。

体育学部体育科学科4年

柳瀬元さん

長野県松本県ヶ丘高等学校出身



情報理工学部情報知能学科4年

上條海夫さん

愛知県立豊明高等学校出身

経済学部経済学科3年

渡邊真直さん

国立名古屋大学教育学部
附属高等学校出身



進化するシラバス

シラバスに望むこと

酒井教授●次にシラバスについてですが、これまで冊子とウェブがありました。来年度からは冊子の印刷部数を減らして、専らウェブシラバスを使うことになりました。これまでシラバスはどんなふうに活用してきた？

上條さん●評価の仕方を見て、出席が自由でテスト100%ではない科目を選ぶ時の参考にしていました。

西尾さん●私は授業の形式を見ていました。講義形式の授業が好きで、ディスカッションの多い科目は避けていたので。

柳瀬さん●一人暮らしだとネット環境のない部屋に住んでいる学生が多いので、紙媒体がなくなると困るかも。1年生だけでも冊子があった方がいいのでは。

石黒さん●ウェブの方は使い方に慣れなかった。冊子の方が見やすかったので、冊子に戻ってしまいました。

蒲さん●ウェブシラバスは情報がたくさんありすぎて、自分の学部を探すのも面倒だったり使いにくかった。取りたい授業がほかの学科だと、よけいに面倒という感じ。

西尾さん●私は冊子の方はあまり使わなかった記憶があります。

渡邊さん●成績の評価を中心に、授業の内容や教科書の有無など、科目を選ぶ時の参考にしました。

辻井さん●教科書の有無を見ます。買ってもし授業で使わない先生も結構いらして、それで何千円も払わされるのは損した気分になるので。

酒井教授●逆に、高かったんだから意地でも全部読んで勉強しようという気にはならないかな？毎回、レジュメを作って配る先生もいらっしゃいますね。

西尾さん●プリントが分かりやすく、受けやすかった授業があります。

辻井さん●授業の初めにレジュメをもらって、教科書を参照しながら授業を進めるというのが良かったですね。

酒井教授●シラバスにこんな項目がほしいという希望はありますか？

蒲さん●前年度の合格者のパーセンテージ。単位を取りやすい科目がどうか分かるので。

上條さん●ある分野に関する科目を全部取りたい場合、一つの科目を見れば関連する授業が全て分かるようにしてほしい。さらに互いの科目を比較できるようにしてもらえば、選択しやすくなります。

柳瀬さん●資格取得に必要な授業は、メインページで分かりやすく紹介してほしいと思います。

石黒さん●教員のプロフィール。面白い先生がいるかもしれないので。

渡邊さん●単位認定の最低条件が具体的に載っていると、学生も安心して受講できると思います。

予習とマナボ

学習効果をあげる工夫

酒井教授●シラバスには各回の授業の内容が書いてありますが、皆さんは授業の予習はしていますか？

上條さん●僕の取っている授業では予習を求められる授業がほとんどないので、してません。

石黒さん●授業の最後に、先生から「これ、来週の授業の内容だから」とプリントを配られた場合には予習しますが、自主的にはしません。

西尾さん●予習はあまりしませんが、復習はします。その授業で出てきた文献を読んだりすることが多いです。

酒井教授●実は1コマ90分の講義を2時間と教え、学生が事前に倍の4時間勉強することを条件に、単位が認定されています。演習なら1コマについて2時間。だから1セメスターの間に取れる科目数に上限ができて、本学では24単位しか履修してはいけないことになっているんです。マナボは見てますか？

柳瀬さん・西尾さん・渡邊さん●見ています。

辻井さん●情報理工学部にはマナボに代わる独自のシステムがあるので、情報理工の学生は見えていないと思います。

酒井教授●本学のシラバスは外部に公開しており、「こういう授業をしている」ということを広く示す社会的な責任があります。でも「今回の授業はここまでできなかったから次回はここから始めます」と書き換える機能がないので、マナボを使おうという話が出ています。で、やっぱり予習してきてほしいので、マナボで予習課題を出そうという動きがあるんだけど、そうなったら予習してきてくれる？

上條さん●うーん、あまり予習が好きじゃないので、チャチャッと答えを書いておしまいってことになると思う。ただ予習したのを評価するという授業ならば、やるかもしれないけど。

柳瀬さん●高校の英語のように、家で訳してきて授業で発言しなければならなかったら、予習すると思います。でも体育学部の周りの友達を見ていると、その時間はないと思



情報理工学部情報知能学科3年
辻井翔一さん
愛知県立中村高等学校出身



情報理工学部情報知能学科3年
蒲恵太さん
岐阜県立郡上高等学校出身

う。特に部活をやっている子は、苦しむことになると思いますね。

石黒さん●僕は全くマナボを利用していないし、そういう情報媒体に行くことがそもそも面倒という人もいるので、そういうものに頼りすぎるのはどうかと思う。

酒井教授●授業の中でも伝えて、詳しくはマナボを見て、というように複数のシステムを走らせれば、より丁寧になるだろうね。

柳瀬さん●あるに越したことはないと思います。

FD活動について

充実した学生生活を送るために

安村教授●これまでFD活動が行われていることは知っていましたか。

全員●知らなかったです。

安村教授●では、FDと聞いても何のことが分からない？

全員●分かりません。

安村教授●大学がより良い授業を目指しているような活動をしているということを知ってもらわないといけないので、FDニュースを発行したり、こういう場を通じて学生さんの意見を聞いて、少しでも取り入れようとしてるんですね。より良い授業を拡大するために、教員、職員が努力しているわけですが、同時に皆さんにも努力してもらわないといけません。





ところで、学生生活を振り返ってみて、こういうことをやれば良かったというようなことはありますか？

上條さん●経済とか英語とか、社会に出てから使えそうな授業にもっと出れば良かったと思う。自分の考えを変えるきっかけになったかもしれないので、それは少し残念でした。

安村教授●1、2年生の時は気付かなかった？

上條さん●気付かなかったですね。自分の将来がまだ見えてなくて、将来に何が必要なのか分からなかったのです。とりあえず必修とかをメインに授業を取っていたので、他の科目が取れなかったというのもあります。

安村教授●1、2年生の時に気付くようにするには、どうしたらいいと思う？

上條さん●よく早い段階から目標を持ってとか言われるんですが、言われ続けてるにも関わらずできないというのは、何か問題があるのかなと思うけど、うまい解決方法は分からないです。

安村教授●システム上の問題なら教員や職員でカリキュラムの変更など考えて対応することもできるけど、アンケートを読ませてもらうと、単位が取りやすいからとか、友達と一緒にだからという理由で授業を選んでいる学生が多い気がする。良くないと思いますが、そのへんで意見があったら。

柳瀬さん●体育学部では視野を広げられるような授業は2、3年になってからが多かったので、1年の時から視野を広げるやり方もあるということを教えてもらっていたらと思いますね。

安村教授●そうですね、大変参考になります。

FD活動の目指す授業



アンケートはこう活用されている

安村教授●学生の皆さんには授業についてのアンケートに答えてもらうようになって2年目ですが、アンケートについてどう思いますか。

柳瀬さん●アンケートに答えるのはいいけど、それが実際にどう活かされ、反映されているのかが分からない。たとえば「講義を受講する学生の数が多すぎる」と書いても、授業を二回に分けて行って学生数を減らすわけでもない。何も変わらないのなら、答えても無駄だと思います。

安村教授●アンケートはFD委員会全員でしっかりと読んで、関連する部署などに伝えて、少しでも改善が目に見える形で出てくるように努力しています。最近は特に空調に関する意見が多くて、新しく作る建物に取り入れてもらうようにしたり、古い建物についても改善を求めています。先生方への個別の要望に関しては、なかなか難しいですが、先生に自覚を持っていただくような働きかけをする必要性は感じています。

酒井教授●申し訳ないけど、授業に関しては「今年度は変わらないけど、自分たちの答えを参考に、来年度その科目を履修する後輩達がより良い形の授業を受けられる」というふうに受け止めてもらえるとうれしいですね。人数に関しても、今年は90人でやっていたのを来年は45人45人と分けて授業をするように考えたりしています。

柳瀬さん●今言われたようなリアクションがあれば、学生は「言ったことは一方通行じゃなかったんだな。次もちゃんと書こう」という気になると思う。でも実際は、僕らの目や耳に入っていないのが現状です。

酒井教授●確かにその通りだね。学生にFDの活動そのものが伝わっていないことを改めて実感します。

渡邊さん●たいていの学生は、何のためにアンケートをやられているのかわからないし、結果も知らされないと困ると思う。授業アンケートの結果は実は学生も見られるけど、見られるのは情報センターのパソコンだけ。どうして大学のホームページなどで簡単に見られるようにならないのか。たとえば在学生のページでアルポの下のニュースのところに、「授業アンケートの結果」として追加すればいいんじゃないでしょうか。

蒲さん●シラバスに載せたらどうですか。前年度の学生がこういう感想を持つ授業なんだということ、次の年度の学生が参考に授業を選ぶことができると思う。僕自身、きちんと感想を書いているので、参考にしてもらえたいと思います。

酒井教授●実は今、シラバスに、この科目を勉強すると何が身に付いて将来どう役に立つかという項目を入れようかという話が出ています。学生が授業を選択する時に、効果があると思う？

柳瀬さん●あると思います。同時に、その科目を履修した前年度の学生のアンケートも載せれば、学生の判断の良い材料になるんじゃないでしょうか。

酒井教授●シラバスに載っていれば一度に見られるし、学生にとっても自分の書いたアンケートが反映されていることが分かる。

柳瀬さん●電子シラバスにリンクを張って、科目などをクリックすれば学生のアンケート結果に飛べるようにしたらどうでしょう。僕らはたとえば携帯電話で曲やゲームをダウンロードする時、他人のレビューを読んで購入するかどうかを決めることがあるので、とても親しみやすいと思います。

酒井教授●そういうシラバスはまだどこもやっていないので、実現したら柳瀬君は特許を取れるかもしれない(笑)。



大学ですべきこと

「美学」だけが勉強ではない

檀上教授●最近の大学生の傾向として、資格取得とかビジネスに役立つとか、非常に実学的な内容を大学に求めている学生が多いと思います。しかし大学とは、学問的に物事を探求する場でもあると思います。皆さんにとっては学生の時にしかじっくり考えることのできない真理や理想といったものを追求していくことも大切ではないか？という意味で、最近の傾向には少し疑問があります。

またその過程で試行錯誤ができる時期が学生時代であり、それができる場が大学というものなのではないか？と思います。

白井教授●学生は授業で知識を得るばかりが目的ではないと思います。皆さんが大学でしたいこと、学生が大学で果たすべき役割は何だと思えますか。

石黒さん●授業や先生から学んだことを、ボランティアのサークルで活かせたらと思って活動をしています。

西尾さん●高校までは先生が教えてくれるまま受け身で勉強していましたが、自分の興味、関心のあることを勉強できるのが大学生だと思います。

蒲さん●大学生はまだ親の庇護のもとにあって独立した存在ではないので、しっかりと社会に出ていけるように準備をしている段階だと思う。

上條さん●確かに大学生は親や大学から守られてるけど、いろんなことにチャレンジできるというメリットもある。もっと課外活動の授業が増えたら、社会人になるための準備がちゃんと積めるようになって、有意義な大学生活が過ごせるのでは。

辻井さん●モラトリアム期間というのももちろんあるけど、在学中に興味や興味を深めて、社会人になった時に活かせるらしい。

渡邊さん●社会人として生きていくために一番重要なのは経済の勉強だと思うので、経済学部はそれが一番できる学部だと思いますね。

白井教授●大学の4年間は本当に短い。その中で自分をどれだけ高められるか、何かを発見できるかで、社会に出てから全然違うと思います。ここにいる皆さんの話を聞いて、しっかりしているので安心しました。

檀上教授●柳瀬君がアンケートに、学んだことを実践できる場があるといいと書いてくれているけど、具体的にはどういうこと？また他の皆さんは自分の学部で勉強したことを実践できる場があると思えますか。

柳瀬さん●今はないのが現状です。たとえば子どもにスポーツを教えようとする時、教える、問題点を見つける、新しいやり方を試してみる、という繰り返しが実践だと思う。失敗できる場が授業の中にあったら、ものすごく役に立つと思う。

石黒さん●国際英語学部の目的は究極を言えば英語を話すことだと思うので、ネイティブの教員と話したり、海外

研修があったりと、実践できる場は充実しています。

西尾さん●文学部ではあまり実践の必要性は感じませんが、自分で研究したことを発表する場があれば理解は深まると思います。

上條さん●ものごとをうまく伝えるという授業の中で、発表している様子をビデオに撮ってもらったんだけど、何でもこんなことを話しているんだろうと反省することがたくさんあった。実践の場を設けてもらおうと、自分では気付かなかった点が見えてくると思います。

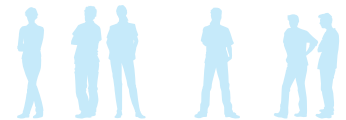
大学教育を良くするために

活かされるFD活動

大友教授●皆さんのお話を伺っていて、FD活動というのが、大学の環境や学生一人ひとりの生活、人生を底上げするような大きな目標を持っていることを改めて実感しました。皆さんは授業を比較評価できる、言ってみれば評論家のようなものです。大学の教員というのは授業の仕方を教わっているわけではないので、それぞれ自己流で工夫しながら授業をしており、意外に自分の授業しか知りません。それに対して皆さんがアンケートで書いてくれた意見は、私たちが自分を磨くのにとても役に立つ助言です。その意見がただちに皆さんに返るわけではありませんが、後輩のためにも、このFD活動を通して、徐々に大学教育は良くなっていきます。今はそのエンジンが掛かり始めてきたという感触があります。今後もアドバイスをいただければと思います。ありがとうございました。

安村教授●大学の主役はやはり学生なので、皆さんがどんなことを願っているかを理解することが大切だと思います。半面、学生は神様ではないので、教員は自分を磨きつつ学生に教えていくという立場で、良い関係を築きたい。そのためにFDがあると思うので、これからもよろしくお願ひします。

酒井教授●今日はどうもありがとうございました。



授業を変える



情報理工学部 白水 始

今回は、情報理工学部におけるFD活動を紹介します。情報理工学部では、情報技術（IT）について学び、それを生活の質や人の賢さの向上に役立つ形で運用・開発できる力をつけます。最近のITには、電子マネーやチケットレスの予約サービス、テレビのCG合成、車の運転支援など、さりげない形で生活を支えるものが増えていきます。それだけ、私たち人間の特徴をよくわかってデザインする力が求められています。また、進歩の速い分野ですので、職場で新しい情報を収集し自ら学ぶ力を身につけておくことも必要です。専門分野の内容だけでなく、「学び方」も学んでおけるとよいわけです。さらに、コミュニケーションの中から新しいアイデアを生み出す力もつけておけば、活躍の場も広がるでしょう。

こうした欲張りな学習目標を達成するために、先生の講義を聞くだけでなく、その内容を自分でまとめたり、さらに深く調べたり、仲間と話し合ったり、わかったことを使って問題を解いたりしながら、うまくいった経験を自分のスキルに変えていく学び方が有効だということがわかってきています。学部では2年秋期からのゼミで実践問題を解決しながら知識を身に付けるプロジェクト型カリキュラムを実施していますので、今回はそこに至るまでの1年半の学部教育をどう変えようとしているかを紹介しましょう。特に「講義をどう変えるか」「学習者中心の授業とは」「授業を結びつけるための授業」の3点に絞って考えてみます。

学生のわからないところがわからない先生？

以前、ある先生が別の先生の講義後にこんな場面に遭遇しました。講義はオムニバス方式で、その回は人の音声知覚の仕組みに関する内容でした。その分野が初めての学部2年生にも興味深かったようで、二人の女子学生が歩きながら、「今日の授業面白かったね。でも、先生何度も『ワジャ』って言ってたけど、あれ何だったんだろうね」と質問し、もう一人も「そうそう、私もわからなかった」と答えていました。

正解は「話者」で、話し手のことを意味します。漢字にすれば何のことはない、その分野の基本用語ですが、先生からすれば、当たり前過ぎて学生がわからないことを想定していなかったのでしょう。このように、専門家は知識があるからといって必ずしも初心者のことがよくわかる訳ではありません。むしろ、知識があるからこそ初心者のことがわからなくなるようです。この点が、講義の難しさの一因でしょう。この傾向は、「知識の呪縛」と呼ばれるものです。これを示す簡単な実験を紹介しますので、ご自身たちでもやってみてください。

まず二人で「叩き手」役と「聴き手」役に分かれます。叩き手は「Happy birthday to you」や「星条旗よ 永遠なれ」など誰もが知る25曲のリスト（童謡がいいでしょう）を準備し、1曲選んで机を指でコツコツ叩きながらリズムを刻みます。聴き手は、そのリズムだけから曲名を当てます（リストも見てよいです）。そして、ここがポイントなのですが、叩き手は聴き手が答える前に「相手が正解できそうか」を予測します。

実験の結果、聞き手はのべ120曲中3曲しか正解できなかったのに対し、叩き手は5割、つまり2回に1回は正しく伝わると予測しました（授業でやると、前者が3割、後者が5割とやはり似た

傾向になりました)。なぜこんな食い違いが起きるのでしょうか？ この実験をした研究者は、人はいったん何かを知ってしまうと、知らない状態がうまく想像できなくなるからだと主張しています。叩き手は歌の題名を知っているだけに、リズムを刻むとき、頭の中でそのメロディーが鳴り響きますが、聴き手にはそれが聞こえません。けれども、叩き手には聞き手の——コツコツという脈絡のない音だけを聞かされる——気持ちが想像できないというわけです。

先生がさりげなく専門用語を使う時、頭の中には専門分野に関する豊かな知識のネットワークが隠れています。が、それは学生には見えません。だからこそ、講義が終わった後でもすぐに質問を求めるのではなく、例えば「隣の学生と話し合って質問を考えてみる」やり方をすることで、わからないことを安心して共有したり、その先の疑問を考えたりできる可能性があります。さらに、知識の呪縛という人の特徴自体を教員・学生が互いに知っておけば、もう一歩進んだコミュニケーションも可能になるでしょう。

学習者中心の授業

人には他人だけでなく自分自身も「わかっている」と思い込みがち傾向があります。だから、説明してみて初めて自分がわかっていることに気づくことが起きます。このような経験を学生時代にしておけば、社会人になってもコミュニケーションを煩わしいと感じず、自分の理解を深めるために使えるようになるでしょう。

この過程を授業で引き起こすために、「ジグソー学習」という授業法をよく使います。ジグソーパズルのピースのように互いに違う資料を分担し、全部合わせると、一つの問いに対する答えが出せる仕組みです。その途中で互いに相手の知



らない資料の内容を説明し合う活動が入りますので、読んだ時にはわかっていたつもりなのが話してみてもわかっていないことに気づく経験もします。こうした授業を繰り返して、一学期で20~30程度の専門資料を読みこむと、一方的に講義される場合に比べ、それぞれの内容をよく理解できるようになります。さらに、互いに結びつけて後で使える知識も構築できます。コミュニケーションスキルも身につくようです。

この方法を応用して「講義の聴き方」自体に関わる研究資料を読み合わせる授業もやりました。すると、最初は「この(知識の呪縛等の)結果をすべての先生に知ってほしい」と言っていた学生が、徐々に先生だけでなく「自分の聴き方も変えなければ」と思い直しがちでした。学期の最後に「自分の好きな講義を一つ選んでその聞き方を変える」プロジェクトを行ったところ、「音声記録をとって聴き直す」「質問を出し合う」などの試みが出て、ホーソン効果(新規なだけで効果があがること)かもしれませんが、「やってよかった」という声が多く出ました。こうした試みを日常的なスキルにしてくれれば、相当強力な学習者が育ちそうです。

授業を関連付ける

ある週の授業内容を翌週に結びつけ、その授業内容をさらに別の授業に結びつけられるような「自己管理型学習能力」を身につけると、学んだことを使いまわせますので、効率的です。

その一つの素材がシラバスです。教員は相当な労力をかけてこれを作るのですが、学生はなかなか見てくれないようです。ある学科の2～4年生40名対象に調べたところ、シラバスを全く見ない人が3割、「曜日時間」「成績評価方法」「授業方法」のみ見る人が3割、「授業概要」など詳細まで見る人が4割という結果になりました。単位が楽に取れるかどうかの主たる判断になっているようです。逆に言うと、自己管理型の学習能力を促進できる余地があり、シラバスを授業内で扱うニーズと効果があると言えます。

そこで学部2年生対象の秋学期授業の冒頭に、自分たちが履修してきた学部固有科目をどのように関連づけているかを話し合っただけの結果を電子的な概念地図ツールで表してもらいました。結果、①プログラミングや数学など同系統の授業



をグループ化しただけのもの、②①のグループ間を媒介となる授業で関連付けたもの、③授業で学ぶ概念で結びつけたものの3種に大別でき、①と②が全体の6割を占める結果になりました。この後で各授業のシラバスと、3人の先生が学生同様の関連づけ作業をおこなった結果に目を通したところ、学生の関連づけが促進されました。授業の間にこれほど関係があるのかと驚いた学生も少なくありませんでした。大学にはホームルームがありませんが、週に一度、せめて月や学期に一度は、学んできたことを振り返って結びつけるグループ学習や、教員と関連づけを話し合える機会があるとよいかもしれません。

PDPD から PDCA へ

FDで鍵となるPDCAサイクルは、Plan-Doの結果をCheckしてActionする必要があります。しかし、Checkする対象が学生の学びですから、これは相当難しい作業です。学習評価が厳密にできないと、素朴な直感で次の実践が決められますので、延々とPlan-Do-Plan-Doを繰り返すこととなります。どうやってエビデンスをとってPDCAのサイクルにしていくかが今後の課題でしょう。私が専門とする学習科学という分野は、学習を科学として扱うための様々な方法を提案していますので、情報理工学部でなされている多様な試みをうまく評価して次につなげる工夫をしていきたいと思えます。

本学部では、公開授業の内容を一覧表に簡単に記載することで、興味関心のある授業内容や方法の授業を選びやすくしました。さらに、2回ある見学機会を活かして、1回目に気づいたことを見学者と授業者の間で共有し、授業の新たなやり方をデザインし、2回目に実践して効果を確かめる試みも行っていく予定です。

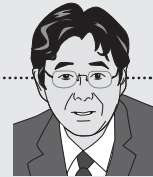
ささやかな授業の工夫

学部3年生対象の選択科目である「臨床心理面接法1」での、私のささやかな授業の工夫をご紹介します。この授業では、うつ病、強迫神経症、自閉症など様々な障害への、認知行動療法と呼ばれる心理療法を概説しています。今年度の受講者は65名でした。

授業の導入部分では、毎回ビデオ教材を10分程度見せています。市販の教育ビデオが多いのですが、テレビ番組を編集したビデオを流すこともあります。臨床場面に関する具体的なイメージのない学生を意識しての試みです。最初にビデオを流すことで、学生の気分を学習モードに切り替えるきっかけにもなるようです。

授業ではパワーポイントを使用しています。ワイヤレスマイクと、パワーポイントをリモコン操作できるレーザーポインターを持ち、教室内を動

心理学部 坂井 誠



き回っています。眠そうな学生を見つけたら、ひと言、声をかけることもあります。「いびきだけはかかないでね」と。それでも睡魔に負ける学生を数人見かけますが、私語はありません。

出欠確認はひと工夫しています。通常の出欠確認のほかに、自作したA5版の出席票による出欠確認を4回程行っています。この出席票には、学籍番号、氏名のほかに、「授業の感想・質問」欄を設けており、感想・質問に対する「匿名による公開希望度」として、A：希望する、B：どちらでもよい、C：希望しない、のいずれかにマルをつけさせるようにしています。Aの全てとBの一部には、次回の授業開始時に必ず答えるようにしています。私自身の授業の振り返りと、学生とのコミュニケーションを深めるうえで、役に立っていると思います。

私の授業

私は国際経営論とグローバル経営管理論という2つの授業を担当していますが、どちらの授業でも毎週小課題の提出が義務付けられています。その週に教える内容について、授業を聞く前に一度自分で考えてきてほしいというのが、この小課題の趣旨です。従って、小課題のテーマは、①身近なものであること、②参考文献なしに手軽にできること、の2点を考慮して設定しています。たとえば、本国本社から地理的に遠く離れた海外子会社を本国本社がコントロールする問題を講義する週には、「海外に留学に行った彼氏(彼女)の現地での浮気を防止するためにはどうすればいいか」という小課題が出されるといった感じです。小課題は1週間前に配られ、講義当日に提出してもらいます。授業の中でそれぞれの学生が考えてきた内容を発表してもらったりもしています。このようなことから、「何かについて自ら考えるきっかけになった」、「自分とは違う他の人の意見が聞けて良

経営学部 銭 佑錫



かった」、などの話を受講生からよく聞きます。

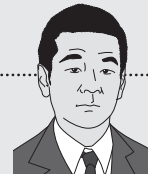
実は、このような「毎週の小課題」を実施するようになったのは、FD活動の一環として行われているアンケート調査の結果がきっかけでした。2003年のアンケート調査開始以来、他の項目ではそれなりの結果が出ていたのですが、唯一「予習・復習を行い自主的に学習した」の項目だけは、2点台から抜け出せずにいました。これが私の戦闘意欲(?)を刺激し色々工夫した結果、2006年秋学期から導入したのが「毎週の小課題」でした。効果はテキメンで、それまで平均2.6くらいであったこの項目の点数が一気に3.6まで上がりました。その結果を見て、誰もいない研究室で小さなガッツポーズをとったことを覚えています。

今後は、授業内容をもう少し小分けにして、小課題の数を増やし、授業前だけでなく授業中にも小課題を与え学生に自ら考える時間をもっと増やして行きたいと考えています。

ルー
特集 **2** 私の授業

人生を左右することもある、だからこそ

国際教養学部 **風間 孝**



多くの学生が恋愛や性、将来のキャリア選択をめぐって、悩みや不安を抱えています。私が担当する女性学の授業では、学生たちの身近に起こっているトピック（デートDV、セクハラ、結婚、子育て、性の多様性、避妊など）について、「女らしさ」や「男らしさ」（ジェンダー）、また「性」（セクシュアリティ）の多様性の観点から、考える機会をつくるよう心がけています。

そのために意識していることは、学生にできるだけ発言してもらおう機会をつくることです。授業では問いを提示し、考える時間を作り、意見を発表してもらおう時間をつくるようにしています。そうは言っても、大教室では手を挙げてもらうことに学生たちは躊躇いがちです。そこで自ら手を挙げて発言してくれた場合には、成績評価に上乘せしています（春学期の220人のクラスでは、発言した学生数は計49人、1回あたり2.8

人でした）。また、発言内容をけっして否定しないようにもしています。多様な意見があることを知ることで体が「性」について考えることにつながるからです。なにが正しい解なのかは、その学生が置かれている立場や状況によって異なります。

同じ授業を受けている学生の中に、自分と異なるとらえ方をしている学生がいることは、大きな刺激になっているようです。コメントカードを読んでいると、授業でとりあげたトピックについて学生同士や家族で、またパートナーと話をしたという学生が増えていくことがわかります。

「性」は、誰にとって避けられない問題であり、ときに人生を左右してしまうことすらあります。だからこそ、むしろ社会に出る前に性について考え、それに向きあえる力を養ってほしいと願っています。

FD サポート事務局だより

学生の皆さんこんにちは。管財課は直接皆さんの相談にのったり、アドバイスをしたりする部署ではないので知らない方も多いと思います。しかし実際には、皆さんが長い時間過ごしている教室をはじめキャンパス内の建物、教育機器備品などの管理を担当しているため、身近な部署といつてもいいでしょう。

中京大学は大学ランキングなどを見ると「キャンパスのきれいな大学」として高い評価をいただいているようです。毎日大学に通っている皆さんにとってはどうでしょう？暑かったり寒かったり、機器の不具合があったりなど改善を求める意見も聞こえてきます。私たちはそんな皆さんの声を受け、設備の改善に取り組んでいます。

今回は、ここ数年の教室設備の改善について2つ紹介します。1つ目はゼミ教室の増設です。近年多くの学部で「アクティブラーニング」を導入する動きがあります。少人数クラスの編成が

快適なキャンパスライフのために

管財部管財課 **松山賢一**

多くなり、ゼミ教室の確保が急務となりました。そこで4、5号館にゼミ教室を増設、教室内の机やイスも持ち運びしやすいよう軽いものに更新しました。

2つ目は使いやすい機器の導入です。教卓上にタッチパネルを付け、パソコンやDVDの切り替えがワンタッチで操作できるようにしました。スクリーンの位置も斜め前方に変え、皆さんの着席位置から黒板を隠すのを避けるよう配慮しました。今後も皆さんの意見を取り入れながら改善を進めていく予定です。

2013年4月には名古屋キャンパスに新たなシンボルタワーとして新1、11号館が誕生します。工事期間中皆さんにはご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いします。

